

カナダ人捕虜Aとの交友20年 —Aの思い、私の思い—

S40年経済 黒田直隆

<初対面>

私はサラリーマンとして珍しい経験をした。それは日本軍捕虜になったカナダ人画家Aとの断続的であるが20年にわたる交友。

彼は昭和17年香港陥落の際に捕虜になった。翌年日本に護送され、鶴見の捕虜収容所に収容され終戦の年に解放。そして今から30数年前に戦後初めて来日。その時がAとの初対面だった。



香港捕虜収容所の捕虜仲間。Aが靴ブラシで車のクランクケースオイルを絵の具代わりに描いた。

「戦時中貴社で強制労働させられた捕虜が来日している。その男が捕虜収容所跡地や働いた造船所の現場を訪ねたい。また、当時世話になった人に会いたいと言っている。彼の希望を直接聞いて協力して頂けないか」

と、カナダ大使館から勤務先に要請があった。社内には『悪い記憶しかなく会社に反感をもっているだろう。対応をしくじれば非難されイメージダウンになるので断るべき。触らぬ神にたたりなし』という意見もあった。

でも結局は受け入れた。勤務先が経団連日加経済人会議の日本側議長会社だからだ。カナダとの友好を率先して促進すべき会社が逃げることは許されないと。アメリカ駐在から帰任直後で対外広報窓口の広報室所属の私が担当を命じられた。

「強制労働は会社が主体的に指示したわけでない。軍部の命令だったと説明すれば理解してもらえるはず。逆に、誠意をつくせば会社のイメージアップになる。だから君はその捕虜に好意をもたれるよう全力をつくせ」

翌朝赤坂の宿泊先を訪ねた。アメリカ人のように大柄で快活な人物を想像していたがきゃしゃで物静かな男だった。彼は挨拶もそこそこに、か細い声からは想像できないほど情熱的に一気に思い出を語った。

「捕虜収容所に入所時、身上書職業欄に画家なので『PAINTER』と書いた。

するとペンキ屋だと誤解され塗装班に配属された。高所にワイヤで吊られた薄い木板に立って船側の塗装をした。掴まるものがなくバランス取るのに苦労した。片側を踏むともう一方が跳ね上がった。グラグラしてめまいがした。毎日が恐怖だった。怖じ気づくと殴られた。激しい殴打で鼻血が出て歯も折れた」

彼の心情は分かるが、こんな話しを延々と続けるので少々うんざりした。1つだけホッとする話題があった。

「そんな毎日だったが救いはあった。優しい『ハンチョウ』のことです。油絵道具一式を用意し作業所裏の物置でこっそり絵を描かせてくれたのです。軍人の上官に処罰される危険を犯して陰ながら助けてくれました。私の恩人です」

彼から幾つか要望が出た。先ず捕虜収容所跡地と鶴見造船所の見学。数日後黒塗りのハイヤーで夫妻を造船所にお連れした。所長等幹部5、6人が玄関で出迎えた。所長の歓迎挨拶の後、総務部長の案内で収容所跡地だと思われる所に向かった。造船所が八方手を尽し場所の見当をつけていた。川沿いということで造船所調査とAの記憶が一致。腰下まで草が生い茂る鶴見川沿いを30分ほど歩き回った。彼は棟番号を3Dと覚えていたが、結論として場所の特定は出来なかった。40年の空白は余りにも長かった。



3D収容所の自画像

一方造船所正門付近は記憶と余り変わらずイメージが沸いたようだ。彼は同行者から遠く離れ、門の前で約10分険しい表情で1人佇んでいた。その後造船所見学、大使館がアレンジした記者会見と続いた。その日の夕刊と夕方のTVで報道された。夕刊は写真入りで『カナダ人捕虜 自分探しの来日』という見出し。後日、その記事を彼自身がカナダの新聞社に売り込み同趣旨の記事が現地で掲載されたと聞いた。



鶴見造船所

で掲載されたと聞いた。

造船所から宿泊先に戻る車中、彼は暗い表情で感想を述べた。

「私にとって正門と通路はおぞましい場所だ。昔と全く変わってない。1人で正門に歩み寄った時何も聞こえず何も見えなかった。当時の場所に連れ戻された。陳腐な社歌が聞こえた。行

列に並ぶ埃まみれの貧相な『サンビャクニジュウゴ』に戻った。胸と背に墨で描か

れた捕虜番号だ。いまわしい思い出だ」

私は的確な言葉が見つからず、「本当に辛い体験でした。大変でしたね」と、殆ど無意味な外交辞令しか思いつかなかった。更に話は続いた。

「運転手の手元を見て思い出した。忌わしい白手袋だ。嫌なヤツだった。そいつは『ソウチョウ』でアメリカ人ボクサーに殴り方を習ったという。私を直立不動で立たせた。おもむろに高官を証明する白手袋を外した。メチャメチャ殴った後手袋をはめ直して立ち去った。手袋が汚れるのを嫌ったのだ。鬼だった。運転手が白手袋をはめたり外したりする度に、最悪の記憶を思い起こした」

敬意を表すためのVIP扱高級ハイヤーが逆効果だった。会社の誠意に感謝すると思ったのは間違いで私はガッカリした。造船所見学の後、当時陸軍通訳だった方の未亡人宅の夕食に招かれ私も同行した。



通訳の未亡人宅での夕食

私は少しでも印象を良くしようと努力した。1週間後に夫妻を女房の実家の夕食に招いたり、1ヶ月間の京都滞在から帰京した時我が家の夕食に招いた。日本の家庭の雰囲気味わってもらうためだ。アメリカ駐在の経験で最高のもてなしは自宅に招くことだと知ってたからだ。



我が家での夕食

彼は次々と面倒な要求をした。私の親切に悪乗りする図々しさと芸術家特有の依怙地さにへきえきした。でも私は何でも協力すると言わざるを得なかった。

一番苦労したのは、優しかった『ハンチョウ』

に会いたいという要求。肝心の名前を覚えていなかった。その人は丸顔で背は約160センチ。それを根拠に探してほしいという。その程度の手掛りしかない上に存命だとしても相当高齢なはず。難題だった。

その『ハンチョウ』を知っている人を捜し始めた。昭和18年から20年の社員名簿から塗装班所属の社員を拾い出し、退社後連絡先が書いてある定退者名簿と照合。照合出来たのは10数名で全国に散っていた。片っ端から電話したが殆ど他界。生存者も寝たきりか痴呆症で話が出来ず。結局見つからなかったと彼に報告すると、皮肉混じりに私にシャーロック・ホームズとあだ名を付けた。努力に対する感謝の

言葉はなくそのおちよくりは不愉快だった。

<再会>

初対面から10数年後に再会した。きっかけはある日の広報室長からの電話だ。「カナダ大使館の依頼で元捕虜Aが『親愛なる友人』の先輩に会うことを希望されています。是非会って頂きたいのですが？」

指名なんて信じられなかった。ひと昔前のことだ。でも後輩を困らせるのは本意でないので渋々会うことにした。渋々なのは、仕事が忙しい上に初対面の印象が悪かったからだ。私は『親愛なる』どころか友人とも思っていなかった。単なる仕事上の付き合いという位置づけだ。



カナダ大使館。左から2人目A夫人

来日目的は大使館主催の彼の「東洋と西洋の結婚」



金閣寺 (左上に「栄華への回帰」の字)

絵画展。

東西の融合がテーマ。いずれも写実と抽象の中間的絵で背景に金閣寺、鎧武士、平安貴族の行列等日本の風物が幻想的に描かれていた。絵画展後のパーティで彼と懇談。

その翌晩夫妻を天ぷら屋でご馳走した。

ところが店に着くなり一悶着。菜食主義者ゆえコース料理で食べれるものはほぼ皆無。幸い知人の店なので女将が部屋と調理場を何度も往復し何とか工面してくれた。見ず知らずの店だったら追い出されていただろう。夫人は恐縮していたが、彼は何で慌てているのかと怪訝な顔するだけ。カナダでは菜食主義者は珍しくないのか？

<3度目の再会>

それから更に10年後再び会うことになった。再会のほんの数年前に彼の回想録の日本語版が出版された。戦時体験と戦後訪日の際の日本人の優しさに触れた経験から、『過去を忘れはしないが許すこと』、『民族の違いを乗り越えて和解する大切

さ』を訴えていた。過去2回の印象は悪かったが、回想録を読んで彼の心中を多少理解したし、考えれば見慣れぬ東洋人にひどい仕打ちを受けたのだ。現代人は関係ないと理屈では理解しても日本人を見る度に記憶が甦り、私の誠意に素直な感謝の気持を表せなかったのだと思う。

また、初対面時は60才そこそこ。画家として名を売ることに必死だったろうし、後年書く予定の回想録のネタも必要だったはずだ。回想録も絵もモチーフは日本がらみなので、日加両国のマスコミも利用したのだ。当時その思いを知れば少しは共感出来たと思うが、一言も触れないので図々しきだけが印象に残ってしまった。

再会の発端は私が久し振りに出した手紙。長年勤めた会社を退職するので今後会うことはないだろう、という別れの挨拶だった。彼の返事は今度は貴方が来てほしいという誘いだった。『今回は自分がお世話する番です。日本からは遠いですがぜひ我が家に来て下さい。女房が作るカナダ料理を食べて頂きたい。私ども老夫婦はもう日本に旅する体力はありません。来てくれませんか?』



バンフ国立公園

回想録の彼の考えに共感していたこともあり、カナダ観光を兼ね訪問することにした。7月末バンフ国立公園の帰途バンクーバー郊外のお宅を訪



満開の紫陽花

ねた。彼の祖国で会うのは始めてだ。玄関前で先ずは歓迎のハグをされた。ハグは何回も経験あるが未だに慣れず恥ずかしかった。その時湧き起こった感情は予想だにできなかった愛おしさだった。想像以上にやせて老いていたからだ。猫背になり背が低くなって残った頭髪はわず

か。20

数年間に私が背でも体格でも追い抜いていた。

広い芝生に囲まれたテラスで菓子、果物をご馳走になり夫妻と歓談した。3百坪の広い庭に青、赤、白の紫陽花が咲き乱れていた。その後朝夕の日課としている散歩道を案内してくれた。5分ほど歩くとアメリカとの国境があった。ロープが張られオレンジ



テラスでくつろぐ

色の看板があるだけの簡単な国境だ。その前で平和主義の彼は嘆いた。

「以前は往来自由だったが9・11以降警備が厳重になり、数ヶ月前国境を越えたら監視官が飛んできて注意された。なかなか平和は訪れない」



食後の記念写真

Aは穏やかな好々爺に変貌していた。夫人の手料理を頂くうちに過去のわだかまりが消え親しみが生まれた。私はワインを飲みながら大いに食べたが、彼はワインも食事も殆ど手をつけなかった。もっぱら多種類のサプリを口にするだけだった。前回より菜食主義を更に徹底していた。夫人は「余りの頑固さに手こずることがある、食事以外のことでも……」とこぼしていた。

「初来日の時貴方は63才で今私が63。23才差の私達が初対面から23年振りに再々会を果たした。また、今義母が貴方と同じ86才。私の両親は亡くなっているのに、貴方が父親のような気がする」と不思議な縁があると話すと、彼はこの偶然の一致に驚きかつ喜んだ。

私は続けて私の思いを披露した。

「正直、私は今まで広報マンと我が社で強制労働した捕虜の関係でとらえてました。私には義務であり仕事でした。だから親しみは感じなかった。でも今回初めて会社を介在せずにプライベートでお会いし意識が変わった。

友人と思うようになった。貴方は回想録で私を親愛なる友人と書いたし大使館からも同じ話を聞いている。少し貴方に追いついた気分です。次はいつどこでお会いしましょうか？ 私がかつて駐在地リオデジャネイロから手紙を出すと、メキシコ在住経験がある貴方は今度ブラジルで会おう、スペイン語で話そうと返事がきました。でももう長旅は難しいでしょう。また私がカナダに来ましょう」と、少し高揚して話すと、彼は「My son!」と恥ずかしそうに手を差し出した。彼の2人の子供は娘なのだ。

夕食後アトリエで絵を見せてもらった。カナダ大使館で見た6、7枚の絵で、いずれも背景に鎧武士等日本の



鎧武士と平安貴族の行列（左上に「栄光よりの旅路」の字）

風物が描かれていた。制作途中のものもあった。彼は日本軍部を嫌悪したが、初来日時1ヶ月も京都で神社仏閣を見て回るほど日本文化ファンなのだ。

「日本が大好きなのです。祖先は日本人だったのではないのでしょうか？」

と、夫人が冗談を言った。



別れの時間になった。夜10時近くの閑静な住宅地は暗闇だった。月明かりを頼りに足元に気をつけタクシーまで30メートルほど歩いた。空を見上げるとガラスの粉をまき散らしたように無数の星がまたたいていた。天の川もクッキリ見えた。子供の頃に見たかつての東京の夜空だ。振り返ると玄関の眩しいほど明るい照明を背に夫妻が手を振っているのが見えた。タクシーが角を曲がるまで振り続けていた。逆光で2人の姿は黒く小さいシルエットだった。

私は4度目の再会を心から願った。

2年後、突然夫人から訃報が届いた。

『89歳の誕生日を迎えた1ヶ月後に亡くなった。2度と彼に会えないとは信じられない。喜びも悲しみも共にしたけどもう出来ない。彼なしに生きることを学ばねばならないが、時間がかかりそうです』

あれから8年が過ぎた。その後連絡を取っていないが、彼女はどのようにしているだろうか？ 私といえば、ネット上の画廊に掲載されているAの絵を見て彼を偲んでいる。彼が好々爺に変貌したのは画家として成功した安堵感もあっただろうと思いつつ……。

付記：Aの絵が多数下記2つの画廊に掲載されています。ご興味のある方はチェックしてみてください。Aの名前は William Allister です。

①<http://www.stephenloweartgallery.ca/home.asp>

②<http://kurbatoffgallery.com/other/allister/0.htm>